

いまだききの歴史

一番新しい日本のページ

また被害！
目で見ても確認できない食の安全性
それでもみんな玉子を食べたいんや！

城陽市の養鶏生産組合が、なんと半年前の玉子を採卵日表示を偽って5万個以上出荷していた。出荷直後から「味が違う」といった苦情に加え、じんましんや腹痛を訴える人がいて事件が発覚。事後調査では回収した玉子から食中毒の原因菌は発見されなかったものの、食品を扱う業者への不信感をいっそうあおることとなった。理由は新鮮な玉子が採れるのを待たずにパック詰めして作業時間短縮するため、古い玉子の保管料節約だという。多くの消費者は品質表示ラベルを見ずに食料を買っているこの時代。品質表示を見ても防ぎようのない被害を及ぼすとはもってのほか。しかも玉子は大切な基礎食品。その安全を侵すとは許しがたい。しかも、不正を行ったのは利益を追求する民間企業ではなく、養鶏生産業者の組合。行政に守られている立場の者が、こんなことをするのは、情けない。食材への不信感がつのる昨今、もはや消費者は味覚や嗅覚で自衛するしかないのか？

なぜ学校を？

意識改革だけではなく具体策をもって生徒たちを守る環境をつくって欲しい

悪意の有無にかかわらず、

大人を締め出すことになるのだろうか…



昨年12月、宇治小学校に刃物を持った男が侵入して児童2人に怪我を負わせた事件が起こった。この事件を受けて、校内にカメラを増設したり、フェンスを補修するなどの防犯対策がようやく具体化した。池田小学校の事件以来、全国の学校のセキュリティに取り組んでいたはずだが、その実は具体策が実施されていなかったようだ。筆者は昨年、仕事で京都府下の小学校や幼稚園をいくつか訪問したが、門をくぐって校内に入っても、何人かが怪訝な顔で見つるまで、こちらから声をかけない限り、話しかけることもなかった。防犯カメラを設置しても、危険な侵入者が全速力で校内に侵入し、刃物を振りかざせば、誰かが駆けつけるまで、何人かの子供を傷つけることだって可能だ。やはり、学校の防犯を徹底するなら、すべてのゲートに係員を置き、出入りする人間すべてに声をかけ、身分証提示や訪問者リストへの署名を求めるようにした方がいい。学校は卒業生も気軽に立ち寄れる場所でもあるべきだから、訪問する側も、される側もそれぐらいの手間はお互い認めても良いのでは？



文芸に光明

「良い本は売れる」を証明してくれるか？ 芥川賞最年少受賞を機に活気づく文芸界

「インストール」で鮮烈デビューした京都出身の作家・綿矢りさが19歳という史上最年少で芥川賞を受賞した。受賞作は「蹴りたい背中」。発表後、書店では売り切れ続出で増刷も間に合わない状態だったとか。近ごろ、書店の売り上げのほとんどを雑誌やコミックが支えているという出版事情。とある書店の店長いわく「もう文芸はぜんぜんダメ。発売日に売れるのは京極夏彦ぐらい」なのだそう。他は「トリビア〜」といったテレビ関連本や、一時的なブームが書店の売り上げを左右している。そんな文芸不毛の時代に、綿矢りさの芥川賞受賞は快挙だ。本人は「生まれ育った京都とは関係ない」とコメントしているが、京都から彼女のような作家が現れたことは、やはり嬉しい。今、再販制、返品制で書店の店主が好きな本を好きなだけ仕入れできないようになっていく書籍流通事情だが、若い力で文芸が活気づきそうな今こそ、国を挙げてこの問題に取り組んで欲しい。



今回の選考が「文壇を守るもの」ではなく、
「文芸界を発展させる」選考だと信じてい。



文◎大塚 祐希

京都で活動するライター集団・大塚祐希事務所CEO。昨年のイスラエル滞在以来、異文化を紹介するTEXTREAM PROJECTを始動。20カ国に及ぶ人々とネットワークを構築し、ポータブルな活躍を目指す。
HP●<http://www1.ocn.ne.jp/tsukapon/>



イラスト◎両口 和史

1967年京都市生まれ。京都精華大学美術学部卒業。北山のオフィスにて様々なキャラクターやイラスト制作をおこなうユニット「キャトル・イラストレーション」のチーフ。猫、フランス車、家具、雑貨、レコード、本、おもちゃ、平日の公園。それらがイラストを構成するエッセンスである。HP●<http://www.d1.dion.ne.jp/ryoguchi>